

その他技術サービス業

「ひとりひとりがスペシャリストです。」 ～努力のプロセスこそが技術社員の“誇りの源”～

7-37 富士テクノサービス株式会社(群馬事業所)

最先端技術を発揮するテクノエンジニア集団

富士テクノサービス（以下「FTS」）は高度な専門技術を持つ人材を経営資源とし、派遣又は請負という業態を営むテクノエンジニア集団である。同社は 1985 年に総合輸送機器メーカーである富士重工業（株）の全額出資で設立された。一部の試作工場を除いて自社に生産現場は持っていない。FTS が育成したスペシャリストたちは富士重工業（株）スバル技術本部を始めとする顧客企業の生産・研究開発現場において、自動車、航空機、汎用エンジン、環境機器等の設計や生産技術を初めとする技術開発業務の担い手として活躍している。

一流のエンジニアこそが会社経営の中核

FTS の社員 541 名のうち、およそ半数の 297 名を擁する群馬事業所。同事業所の社員のほとんどがテクノエンジニアである。エンジニアたちを人材教育の面からサポートする管理本部・教育企画室の津田室長は、「一流のエンジニアこそが会社経営の中核である。」と誇らしげに言う。機械設計に従事する社員が多い FTS にとって、設計・製図の技能は技術の基礎となる。群馬事業所にも製図関係の技能士が 80 余名いる。しかし、津田室長は、「設計・製図の技能士が多ければ、優れた技術者が多いということにはならない。」と語る。「技術開発力が問われる FTS において設計・製図の技能は必要とされる技術の基礎にすぎない。設計製図を必要としない業務に従事している社員も多い。顧客の信頼に足る力を発揮し続けていくためには、設計・製図工程以外の技術力も高めていかなくてはならない。」とあくまで冷静だ。このような人材教育担当者の高い目的意識が、多くの技能検定合格者を生み出すことにつながっているのだ。

技術社員の 8 割を技能士 2 級の検定合格者に

津田室長は、技術社員の 80% が 2 級の技能検定に

合格するという目標を掲げつつも、検定合格はあくまでも社員本人の自己啓発の一環と位置付けている。会社が応援するのは積極的な自己啓発の意思を持つ社員だ。そのため、あえてテキスト代や講師謝金の負担、勉強のための場所の提供など間接的な支援にとどめている。津田氏によれば、「本人のやる気が強くなければ脱落する。学習が続かなければ無駄になる。」と厳しい。



技能検定受検のための研修室

管理・監督者としての能力も育てる技能検定

25 年前の FTS 設立当初は親会社である富士重工からの出向者や OB が若手・中堅を指導してきた。現在、こうした指導者層が急速に減少しつつあり、指導力を発揮できる管理・監督者の育成が重要課題となっている。業務の基礎、全体像、段取りを把握し、無駄なく執行する能力は、若手・中堅を指導するうえでの重要な能力である。技能検定に合格することは、こうした能力を育てることに大いに役立っている。

努力のプロセスが技術社員の“誇りの源”

勉強会は毎週土曜日、毎回 6 時間実施している。これを 10 ヶ月間継続する。受講者にとって大きな負担だ。だからこそ、合格者はおのずから業務に向かう姿勢が違ってくる。合格したことはもちろん、そこに至る努力のプロセスが社員にとっての“誇りの源”となるのであろう。派遣又は請負という業態であるがゆえに、上司や先輩からの受検の働きかけが少なくなりがちであることを津田氏は残念がる。それでも、今年 49 名の受講者がいるという事実は、やはり「最先端技術を発揮するテクノエンジニア集団」という企業文化が根付いていることの証左であるといえよう。



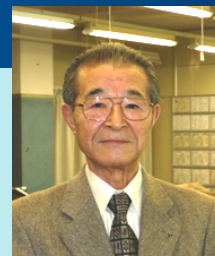
自身も「全技連 機械・プラント製図マイスター」である、管理本部・教育企画室長の津田氏

富士テクノサービス株式会社

- 業種：その他技術サービス業（エンジニア派遣・請負）
- 設立：昭和60年
- 従業員：297名
- 住所：群馬県太田市
- 技能士：85名
- 代表者：大竹実（事業所長）

技能士へのインタビュー

松木 敏行氏（67 歳） 1 級機械・プラント製図技能士



人材育成に情熱を注ぐ根っからの技術者

松木技能士は、工業高校（機械科）を卒業して富士重工に入社。富士重工では自動車の足回り設計を 34 年間経験し、協力工場の技術部に 3 年間在籍した。この協力工場において、経営難を理由とする技術部門の不要論が出てきたことを契機に退職したという根っからの技術屋である。

その後、FTS が設計要員の増強を図っているという情報を耳にして再就職した。FTS では設計業務の品質管理等を担当したのち、現在は非量産車の設計応援を担うかわら、人材育成に情熱を注いでいる。社内の技能士会会長でもある。

自主的な勉強会の成果を技能検定で試す

35 歳当時、「機械・プラント製図」1 級の技能検定に合格した。「身の回りの技能者と比べて自分の実力のなさを痛感していた。そこで、仲間と勉強会を始め、力試しのつもりで技能検定 1 級を受検した。」と松木技能士は懐かしむ。それまでに身に付けた知識・技能レベルを公的に確認したいという単純な動機だったとのことである。しかし、初めての受検は不合格。実力のなさを改めて痛感した。そしてこのことが、検定合格に向けたその後の情熱につながった。

「1 級」の名に恥じない実力を維持する責任

1 級技能検定に合格してからは、大いに自信とプライドを持つことができた、と松木技能士は検定合格の効用を説く。一方で、「1 級」の名に恥じない実力を維持する責任を感じた、とも語る。「技能士にしても現代の名工にしても認定マイスターにしても、資格等を取得することは、本人にとってプライドになることでもあり、一方でそれにふさわしい実力と責任感を持つことでもある。いわば、自分自身に足かせをつけて、実力向上に追い込むという姿勢が大切だ。その意味で、技能検定 1 級に挑戦するということは意義深いことだと思う。」という松木技能士は、今もなお機械設計の研究に余念がない。

若い技術者を育成するという使命

松木技能士は、1 級技能検定合格ののち社内の製図勉強会のリーダー役も買って出た。これもまた、1 級技能士である自分の責任の果たし方としての選択であった。

「自分が合格したことは、結果的に後輩の指導にも役立った。」と実感を込めて松木技能士は話してくれた。この勉強会は 30 数年が経過した今でも続いている。

3 級は当然、2 級にとどまるな、1 級がスタートだ

会社は技術社員の 80% に「2 級」の検定に合格してもらおうという目標を掲げているが、松木技能士は『「2 級」を目標にしているようでは進歩がない。』と、技術者らしく、より先を見据えている。設計製図部門で働くためには、製図、強度計算、加工工法、素材など多方面の知識・技能が必要とされる。本来は工業高校や職業訓練校で基礎を教えるから社会に送り出すべきである。「技能検定 3 級レベルは入社時点で取得していて当然の技能だ。」というのが持論だ。学校の代わりに、会社が 3 級を支援するというのは残念な状況だと言わざるを得ない。技術に関する学校教育のレベルを上げ、公的な育成機関を充実させなければ、中小企業の発展はない。松木技能士は技術者として、そう確信している。



研修室の壁に掲げられたたくさんの合格証書。松木技能士の指導成果でもある。

設計・製図にゴールはない

自分が設計製図する製品には、自分の責任と権限が存在している。だから、自分自身が日本一にならなくては日本一の製品にはならない。機械・プラント製図 1 級の上には技能検定がないが、設計製図の技能の幅と奥行きにゴールはない。時間を作り、さらに磨きをかけつつ、後進の育成に関わっていきたい。松木技能士は生涯現役のエンジニアである。